



作業学習

1 「作業学習」とは

知的障害のある児童生徒に対しては、「各教科、道徳、特別活動及び自立活動（以下「各教科等」という）を合わせた指導」を行うことができます。作業学習は「各教科等を合わせた指導」の一つで、中学部の「職業・家庭」、高等部の「職業」及び「家庭」等の内容だけでなく、各教科等の広範囲の内容が取り扱われます。

作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学ぶものです。

ねらいは、職業生活及び家庭生活に必要な基礎的・基本的な知識と技能を習得させ、勤労を重んずる実践的な態度を養い、進んで社会生活に参加していく能力を養うことです。

2 作業活動の種類

【自主生産作業】

農耕、園芸、木工、陶芸、印刷、紙工、縫製、織物、ビーズ加工、皮工芸等の作業種目が挙げられます。

農耕や園芸は、季節や天候に左右されたり収穫までの見通しが持ちにくかったりしますが、自然を相手にするため、人との関わりが苦手な生徒には取り組みやすい活動です。

どの作業種目も学校独自で作業内容を決めたり、工程の分析や工夫を行ったりできるので、多様な生徒に対応することができます。生産された製品がどのように使われるのか分かりやすいので、意欲的に作業活動に取り組むことができ、成就感・達成感も得やすいと言えます。同時に、職業生活に必要な基本的な知識や技能、態度を指導することができます。

【サービスの作業】

産業構造の変化に伴い、リサイクル、ビルメンテナンス、流通サービス、喫茶・接客、介護等のサービスの作業が行なわれることが多くなってきました。

作業活動が、サービスを受ける相手の立場を考慮して取り組む点に特徴があります。その点で、作業技能の向上とともに、他者理解・自己理解の力の育成がねらえます。

この作業種目では、技能検定やアビリンピックへの参加等が取り入れられてきました。しかし、この取組の意味は、より質の高いサービスを提供することを目指して「チャレンジする意欲」を高めることにあります。検定結果や入賞そのものよりも、生徒自身が目的意識を持って取り組み、取組の過程を振り返るようにすることが重要です。

【委託作業】

企業や地域からの仕事を請けて取り組む、内職的作業や清掃作業等があります。

教育課程上は、産業現場等の実習の事前学習や校内実習としての位置付けのほか、週時程表への位置付けをしている学校もあります。



内職的作業は、正確性はもちろんのこと、納期などの信用を保つ必要もあり、効率性、責任感、協力・共同、持続力、集中力等の高い知識や技能態度を育成することができます。

【校外作業】

校外の商店や企業、公共施設等に直接出向き、場と仕事を提供していただいで取り組みます。実践校では、週時程表に「トライアル実習」、「作業学習（地域）」などと位置付け、数人のグループで教師と共に出掛けています。

【産業現場等における実習】

中学部の職業・家庭科及び高等部の職業科に示されている「産業現場等における実習」（一般に「現場実習」や「職場実習」とも呼ばれている）を、他の教科等と合わせて実施する場合は、作業学習として位置付けられます。

産業現場等における実習は、現実的な条件下で、生徒の職業適性等を明らかにし、職業生活ないしは社会生活への適性を養うことを意図して実施するものです。実習の目的、時期、期間や、個別かグループか等、綿密な計画が必要です。

3 作業学習の押さえ

- 生徒にとって、教育的価値の高い作業活動等を含み、それらの活動に取り組む喜びや完成の成就感が味わえること
- 地域性に立脚した特色を持つとともに、原料・材料が入手しやすく、持続性がある作業種目を選定すること
- 生徒の実態に応じた段階的な指導ができること
- 生徒の実態に応じて、共同で取り組める作業活動を含んでいること
- 作業内容や作業場所が安全で衛生的、健康的であり、作業量や作業の形態、実習期間などに適切な配慮がなされていること
- 作業製品は利用価値が高く、生産から消費への流れが理解しやすいものであること

4 作業学習の進め方

① 目標設定

目標設定の観点としては、作業態度や作業習慣の形成に関する事柄と、作業に必要な知識、技能の習得に関する事柄が押さえられます。

個人目標は、長期と短期で考えます。長期目標は、個別の指導計画の作業学習の目標と重なり、1年間で達成できそうなことを設定します。短期目標は、単元ごとの個人目標や、本時の個人目標となります。

目標設定で最も重要なことは、常に、評価とともに見直し修正を図ることです。

② 作業種目の設定

作業種目の設定に当たり、作業の内容や工程から作業種目の特徴をつかみます。

作業種目の内容については、情報科や主として専門学科において開設される教科「家政」「農業」「工業」「流通・サービス」及び「福祉」も参考になります。

上記に加え、生徒数、作業場所、施設・設備、指導者等の条件を考慮し、学部目標に見合った作業種目を設定します。

③ 作業工程及び作業内容の分析

作業工程の分析とは、完成品ができるまでの手順を分析することです。多様な生徒の実態に応ずるためには、分析した各工程をさらに細かく分析したり、新しい工程を加えたりすることが必要です。

作業内容の分析は、一つの作業工程を遂行するために必要な要件を整理することです。そのことで、目標や必要な支援が分かりやすくなります。

作業工程及び内容の分析をするときには、作業学習の準備や後片付けの工程も含めて考えることも大切です。意欲や態度など、職業生活に必要な基本的な能力が含まれています。

④ 作業意欲を高める工夫

生徒は、明確な目的意識や課題意識を持つと、意欲的に作業に取り組めるようになります。手立てとして、教材・教具を開発したり、補助具を工夫したりします。製品が他者に認められたり、作業活動を通して感謝されたりすることによっても、作業意欲を高めることができます。作業量や作業目標を明確にし、適切な自己評価や他者評価を取り入れることも、意欲の向上につながります。

⑤ 評価について

評価は、興味・関心、意欲、態度、知識、技能等について行うことが一般的です。興味・関心、意欲、態度は、各作業種目に共通した評価項目が設定されますが、知識と技能は、作業種目の特性を受けて多様な評価項目が設定されます。

評価の目的は、評価によって生徒の全体像を把握し、指導の反省を行い、その後の指導に役立たせることです。また、生徒自身の自己評価も大切です。そのためには、作業日誌等の書式や活用の工夫も有効な手立てです。いずれの場合でも、なぜその評価なのかを、生徒自身が理解できることが重要です。

5 作 業 学 習 Q & A

○ 中学部の作業学習と高等部の作業学習の違いは？

作業学習としての違いはありません。

多くの場合、中学部から作業学習が始まります。そのため中学部では、働く意義を学ぶために働く喜びを味わう活動を十分に体験させる取組が大切にされます。同時に、職業に関する基礎的な知識、安全な道具や機械の使い方、役割の理解や協力に関することが指導されます。

高等部では、中学部の作業学習を踏まえて、産業現場等での実習とも関連し進路選択につながる自己理解や自己決定の力、職業生活に必要なより確かな態度、知識、技能、体力等を育てる指導がなされます。高等部は、社会参加を目前とした厳しさが先行しがちですが、社会参加、社会自立のためには、確かな自己肯定感に基づく意欲を育てることが重要です。

○一人で全工程を担当させる場合と一部の工程を分担することの違いは？

全工程を担当させることによって、作業全体の見通しを持たせることができます。一部の工程を分担させる場合は、分担した工程の役割を理解させ責任を持たせることができます。また、他の工程とのつながり（他者との関わり）も指導できます。指導のねらいに合わせ、全工程を担当する時期や分業にする時期を年間計画に位置付けます。個々の生徒においても、個の課題に応じてこの二つの取り組み方を選択、工夫することが大切です。

○作業学習では動線や環境の整理が大事といわれるのはなぜですか？

安全性を確保し、効率や生産性につながるからです。さらに、机上の整理や環境整備は、生徒の主体的な動きや判断力、思考力を育てることに有効です。そのため、生徒自身に動線や作業環境を整備させることも意味ある学習になります。

○教師の動きのポイントは？

教師の立ち位置は、指導のねらいによって変わります。生徒に新しい作業を教える場合は、きちんと手本を見せます。生徒が正しく作業が進められているかを見届ける場合は、見守りや助言のできる位置にいます。主体的な取組をねらう場合は、評価の場を明確にし、教員は作業の一部を分担することもあります。この場合、教師は、働く姿のモデルと同時に作業の下準備や点検を進めることができます。作業ペースを上げる必要がある場合は、ペースメーカーとして作業工程の中に入り込むこともあります。教師の動きも、常に、「何のために」を考えることが大切です。

○作業学習でバザーを行うときのポイントは？

バザーを目的とすることで、製品作りの目標が明確になり、かつ評価を得ることができます。その際大切にしたいことは、完売することだけでなく、売れ残った製品から学ぶことです。そこからは、製品作りへの取組や買ってくださる相手の立場の理解等の課題が見えてきます。完売できた時にも、なぜ完売できたのかを丁寧に振り返らせることが大切です。製品を使っただけの感想をいただくことも振り返りを深めます。

○産業現場等における実習の評価を日々の指導につなげる意味は何ですか？

産業現場等における実習の評価は、生徒の評価というだけでなく、学校教育や家庭生活の外部評価でもあります。また、評価を、学校や家庭の指導の見直しにつなげる必要があります。生徒や保護者とともに、実習の評価を振り返り、個別の指導計画の見直しにつなげましょう。

